

いま、なぜ金融・経済教育が求められているのか

日経STOCK119の表彰式に合わせて記念シンポジウムが、日経ホールでの教育の現場、経済の現場で活躍中の著名人を迎え、経済教育やこれからの

記念講演

「これでわかる!国際経済の見方～世界地図から見えてくるもの

世界地図を見ながら世界経済の見方を考えてみましょう。□に世界地図と言つてもさまざまな違いがあります。世界を見る鍵はその違いの間にある何かを考えるところにあります。

まず、世界地図を思い浮かべてください。頭に描いた地図はたぶん日本が中央、右手側にアメリカがあるものだと思います。でもこの地図を思い浮かべるのは私ただけです。

地図は発行国などによって異なり、中心はヨーロッパ。日本は東の外れです。イギリスの世界地図では世界のあたりを「東」とイメジします。イランやイラクのあたりを「中東」と言うのは、東の途中にあるから、日本のあたりを「極東」と呼ぶのは東の外れという意識だからです。この地図を見れば、北朝鮮の核問題をめぐる六カ国協議の三入など「極東」の大入り

が欧米では小さな扱いであることも理解できます。既に核兵器らしきものを保有している北朝鮮と比較すれば、イランは初歩段階。にもかかわらずイランの二入の扱いが大きいのは、東の外れの出来事より近いイランのほうが気になるから。欧米人にとって北朝鮮の核問題はしよせん「極東」の出来事なのです。

例をもう一つ。イランの世界地図にイラニルは存在していません。イラニルはそもそもイラニルという国の存在を認めていない。だから地図にも存在しないのです。

地図は時代によっても違います。かつて台湾で使われていた世界地図では、台湾は「中華民国」の名で「モンゴル」の国です。この地図は「タタリ」です。八年前によりやくモンゴルを表記するようになりましたが、「中華人民共和国(中国)」はまさに「中華民国」のままです。一方、中国の世界地図では「中華民国」は存在せず、台湾は台湾島となっています。

北方領土問題はどうか。中国の地図では北方四島は日本のものとしています。反日感情の強い中国

国が、なぜ日本の主張を認めているかと思つてみましょう。□に「敵の敵は味方」です。かつて中国と旧ソ連は、中国が核兵器を作り始めたことをきっかけに対立し、自国防衛のためにそれぞれが敵の敵を味方に引き入れ、包囲網を構築してました。その過程で中国はソ連と激しく対立していたアメリカを包囲網に引き入れるため、日本とも友好関係を構築することが必要と判断。北方領土問題については日本の立場を尊重することにしたのです。もちろんロシアの世界地図では北方四島はロシアのものになっています。ちなみに日本と竹島(韓国名・独島)をめぐる対立が続く韓国の地図では北方領土はロシアのものです。

このように地図は発行国によって、また作成した時代によって、多くの違いがあります。そこからは各国の持つ歴史や、国同士のパワーバランスが投影されています。影されていると思いませんか。最後にお見せするのはドイツの子ども用タブレットです。これには世界地図上に各国のイメージ画があるのですが、さて日本には何が描いてあるのか。何と忍者、芸者、お相撲さんなどが描かれています。現代のドイツでもこれが日本に対するイメージなのです。「は……」と思われるかもしれません。逆にならわれ日本人の中には、ドイツについて「セーザやビールしか思い浮かばない人も少なくないでしょう。でもそれでは不正確なのです。

つまり、知ろうともせず、直接見もしないで、ステレオタイプな考え方を抱き続けるのは危険なこと。世界は変化しつあります。その変化を知つて欲しい。自分の見方が絶対だと思わず、別の見方があってもいい。自分と違う国、今ほどうなのかを知ろうとしてくれれば自分の目で見たいのです。世界を若々しい感性で見つめ、先人観のない世界観を構築し、明るい未来を切り開いていただきたいと思つています。

パネルディスカッション

「金融・経済教育の現状と今後」

